

氏名	余 澤 涛
授与した学位	博 士
専攻分野の名称	文 学
学位授与番号	博甲第 6528 号
学位授与の日付	2021 年 9 月 24 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	外来語略語の形成についての史的研究
学位論文審査委員	教授 江口 泰生 教授 宮崎 和人 准教授 京 健治 准教授 西山 康一

## 学位論文内容の要旨

余澤涛『外来語略語の形成についての史的研究』は A4 版、40 字×36 行（1 頁およそ 1360 字）で本論 152 頁、附録として 50 音順に配列した略語リスト 91 頁分を付し、合計 243 頁からなる。

本研究は外来語が短縮される現象（パーソナル・コンピュータ→パソコン、エロティック→エロなど）について、明治・大正期、昭和前期、昭和後期、平成期のように時期を分け、その時期に行われた様々な規則、略語数の増減を明らかにし、外来語略語の形成を通時的に記述したものである。章立ては以下のとおり、序論、本論、結論、附録からなる。

序 論

本 論

第 1 章 外来語略語の語例調査—明治・大正期から平成期まで—

第 2 章 原形と不対応の略語の処理

第 3 章 明治・大正期における外来語略語の形成—単語型略語を中心に—

第 4 章 明治・大正期における外来語略語の形成—複合語型略語を中心に—

第 5 章 昭和前期における外来語略語の形成

第 6 章 昭和後期における外来語略語の形成

第 7 章 平成期における外来語略語の形成

第 8 章 外来語略語の形成における史の変遷

結 論

附録：略語リスト

序論ではまず研究の目的を示し、辞書から用例を採取する際の調査方法、対象とした辞書の書誌

的説明を行う。次に先行研究における外来語略語の分類およびその問題点を挙げ、本研究における分類方法を提示し、その視点から網羅した先行研究を批判的にまとめている。

本論は8章からなる。第1章において、明治・大正期から平成期までの外来語略語の具体例を挙げ、統計的におよその傾向を示した。

第2章において「原形と対応の略語（キューピッド→キューピーなど）を処理する。時代順に具体例を挙げながら、原形と対応しない略語の原因を分析した。原形と対応しない略語の中で、カタカナ表記のゆれによって形成したもの、外国語音をそのまま音写したもの、長音の追加によって形成したもの、および複数の異なる外国語から略語化されたものなど、様々な原因で造られた語例が共存していることを明らかにした。

略語の形成について、規則的に生成される短縮語と個別的な原因で生成される短縮語があるため、考察を行う際に、両者を分けて分析することも必要であることを述べた。

第3章「明治・大正期における外来語略語の形成—単語型略語を中心に—」は単語型略語を中心に、明治・大正期の外来語略語を収集し、用例を分析、外来語略語形成における規則を明らかにした。それ以外に、たとえばモルヒネ→モヒという略語の形成には江戸期の化学書・医学書には「莫爾比涅（モルヒ子）」「莫比」「莫菲」（モヒ）と表記され、漢字表記が介在したことでこうした略語が行われたことを江戸期の化学書・医学書の例を引用しながら説明する。また同時期に舶来したフランネル→ネル、フランケット→ケットと同音衝突を避けるように後部を保存したことを明らかにしている。

第4章は複合語型略語を中心に、語例を収集し、明治・大正期の外来語略語形成における規則を明らかにした。

第5章において、昭和前期の語例を収集し、昭和前期における外来語略語の形成規則を分析した。

第6章において、昭和後期の語例を収集し、昭和後期の外来語略語形成規則を分析した。第7章において、平成期の語例を収集し、平成期における外来語略語の形成規則を分析した。

以上、第3章から第7章において、明治・大正期、昭和前期、昭和後期、平成期の用例を分析した結果、単語型略語の形成について、以下の4点を明らかにした。

- 1) 単語型略語において、原形の前部を保留して形成することが主流である。
- 2) 単語型略語の主流形式は2音節にすることである。拍から見ると、2拍～3拍の長さを持つ単語型略語が多い。
- 3) 接辞を持つ単語型外来語の略語化において、接辞を削るなどして、接辞が略語の形成に影響することがある。
- 4) 昭和後期以降、4拍の長さを持つ単語型略語が多くなっている。これは複合語型略語の前後結合型という省略パターンの影響をうけた結果であると考えられる。

一方、複合語型略語の形成について以下の4点を明らかにした。

- 5) 複合語の前単語を保留して略語を形成することが主流である。意味的には「修飾部＋主要部」の意味構造を持つ語は略語化において、意味の弁別に役立つ修飾部のほうが保留されやすいということも行われた。

6) パソコンなどの前後結合型において、2拍・2拍構成が主な形式である。漢語の中にも「学校」「生活」などのように、4拍構成の語彙が多く存在する。また漢語の複合語でも「上等白米→上白」のような2拍+2拍構成の語例が見られる。2拍+2拍構成が前後結合型の主流形式になるのは、複合語型外来語が漢語のような語形の型にはめられた結果であろうと思われる。

7) 明治・大正期において、パソコンのような前後結合型は例が少ないが、昭和後期以降、急増し、その後、複合語型略語の主流形式になった。

8) 複合語型略語の中で、アパートメント・ハウス→アパートのような略語が見られる。このような略語はアパートメント・ハウス→アパートメント→アパートのような二段階の略語化を経て形成した。類例、バスケット・ボール→バスケット→バスケ。

第8章において、以上、第1章～第7章の分析で得た結論を用いながら、各時期における単語型略語の形成を比較し、明治・大正期から平成期に至るまで、単語型略語の略語パターンの変化を明らかにした。さらに、各時期の複合語型略語の形成を比較し、複合語型略語形成における略語パターンの変化を明らかにした。

全体において次のような点が注目される。外来語略語の形成において、戦前戦後を境として略語パターンの推移が見られる。

単語型略語の場合、昭和後期以降、4拍の長さを持つ略語が増える傾向が見られる。その原因について、複合語型略語・前後結合型の2拍+2拍の4拍構成からの影響が考えられる。前後結合型の2拍+2拍の4拍構成は生産力が高まり、その勢力が単語型略語に及んだ結果、4拍長さの単語型略語が増えてきたと考えられる。

複合語型略語の場合、顕著な変化点は二つがある。一つは明治・大正期、昭和前期において、前単語保留型と比べて、前後結合型の語例が少ないが、昭和後期、平成期において、前後結合型の略語が急増し、主流形式の一つになってきた。

もう一つの変化は前後結合型における2拍+1拍の略語の増加である（スマホ、スタバなど）。2拍+2拍構成が前後結合型の主な形式であることは変わらないが、平成期において2拍+1拍の略語が増えてきた。2拍+1拍の略語の多くはその原形後単語の第2拍が特殊拍である。その形成は原形後単語の第2拍にある特殊拍と関わっているが、新しく普及した外来語という側面もあり、そのためにこれまでの略語パターンと違う形になった可能性もある。

外来語の略語化は明治・大正期から盛んに行われ、昭和前期を経て、昭和後期、平成期に急増してきた。その過程から外来語が日本に輸入され、さらに外来語が日本語化する過程がうかがえる。そして、外来語略語の形成は音韻的要素以外に、語彙的要素、分節意識、表記の介入、漢語・和語の略語法の踏襲など、様々な要因によって多様なタイプの略語が出現したと考えられる。音韻的要素は基礎的な働きをしているが、それだけではすべての外来語略語の形成を説明するのは難しいことを明らかにした。

結論では、以上をまとめ、先行研究の結論および本論文の考察で導かれた規則を用いて、外来語略語の形成を記述した。

## 学位論文審査結果の要旨

余澤涛の学位論文『外来語略語の形成についての史的研究』の審査会は、7月9日（金）6時より2-6セミナー室において、主査江口泰生のほか、近代日本語史の京健治准教授、言語学の宮崎和人教授、近代文学の西山康一准教授の4名で審査を行った。

本論文は公刊した活字論文3本、投稿中論文1本と学会発表2本を中心にして作成されている。A4版、40字×36行（1頁およそ1360字）で本論152頁、附録として50音順に配列した略語リスト91頁分を付し、合計243頁からなる。

本論文が優れている点は以下の点である。

第一に研究の基礎資料とした用例収集の誠実さ・丁寧さである。国会図書館データベースから対象を選び、岡大附属図書館や県立図書館の辞書や自分で購入した辞書48冊を対象とし、概算3万ページ分、概算10万単語から目視によって用例を抽出し、データベース化、重複する例は初出年によって分類し、基礎資料を作成している。いつ頃、どの辞書で、どういう略語が採録されたかが分かる資料になっている。

この作業は附録として50音順に配列した略語リスト91頁分に纏められている。本論文に生かされているだけでなく、今後、さらに研究を進めるにあたって、貴重な資料として活用されるであろうと思われる。

第二として、その基礎資料によって、モガ・モボなどの個人による略語、漢字表記が影響して成立したと思われる略語（混凝→コンクリ、モルヒネ→モヒ）など、個別的な原因で出現した略語を選り分けていることである。その調査には江戸期の化学・医学書も参照するなど、一つ一つ大変、丁寧な調査がなされている。新たに発見された事実も多い。

第三に、個別的な略語を取り除き、中心的な例を対象とすることによって、略語のパターンに時代的な大きな変遷があったことを明らかにしている点である。そしてその規則に説明を与えている点である。例えば以下のとおり。

- ・明治期においては、モーニング（コート）、イブニング（コート）など意味的に弁別的な部分を保存すること。
- ・インフレ（一ション）、デフレ（一ション）など接辞部分が削られやすいこと。
- ・単純語において初期には2～3拍になったが、昭和後期に4拍の略語が増えること。これは複合語型略語・前後結合型の「2拍+2拍」の4拍構成からの影響が考えられること。従来指摘されていない事実であろうと思われる。
- ・一旦、インター（チェンジ）という略語が成立・定着すると、その後ではインターという略語は同音衝突が生じるために略語が阻止されること。

第四として、明治期以前、江戸時代の和語や漢語にも目を向け、「上等白米」を「上白（ジョウハク）」と呼ぶ例などを指摘し、外来語の略語規則は江戸時代の和語・漢語の略語形成の型をなぞった可能性があることを指摘している点である。

こうした点を手掛かりに、外来語の略語化の方法、たとえばモーニング（コート）のように一語

にする方法、パソコンのように2拍+2拍にする方法、エロなどのように2～3拍にする方法などに、和語や漢語の略語方法と共通点を指摘している点である。モーニング（コート）は足久保茶→足久保となるような方法であり、パソコンは上等白米→上白とするような方法や、オノマトペが2×2の構成を持っていることと対応する。エロ（ティック）は、まじめ（真面目）→まじ、すこし（少し）→すこ、すこぶる（頗る）→すこ、へこみ（凹み）→へこ、とするような方法である。

つまり、外来語の略語は近代になって突然変異的に出現したものではなく、和語や漢語から略語をつくる方法を下敷きにして出現したものであることを指摘していることになる。これはこれまでの研究がもっぱら現代語を中心に平面的な説明が行われてきたことに対する重要な反省になり、今後の略語研究に新たな方向性を示す重要な指摘となったと考えられる。

質疑では問題点も指摘された。辞書以外、たとえばネットや若者言葉などでの略語はどういう状況なのか（リプライ→リプなど）、隠語・俗語的性格から分析できないか、できるとしたらどうなるのか（アルバイト→バイト、前掲リプライ→リプなど）、明治期における国家的な政策面も含めて、外来語を翻訳する流れとそこからの離脱といった面はどうか（明治初期のフィロソフィー→哲学、ベースボール→野球など）、など他の視点からの分析も必要であることも指摘された。

また略語が略語形のまま語彙として一旦保存された場合、その形と一致する略語は避けられるというように、語彙と形成を分けるといような理論化を深めるべきという意見もあった。また江戸期の略語については、さらに調査や説明が必要であるという意見も述べられた。

このように残された問題もあるが、それはこの研究が一定の結果を導き、それを礎としてこれからの研究を積み重ねていく射程を持っていることの反映でもあった。この研究によって略語研究が研究する価値のある豊饒な分野であることも確認し、審査員全員、今後の研究の進展を大いに期待した。

以上、全体として調査に多大な時間をかけた、丁寧で誠実な論文であると認められ、新見も多い。審査員は全員一致で博士論文に相応しい論文であると認定した。